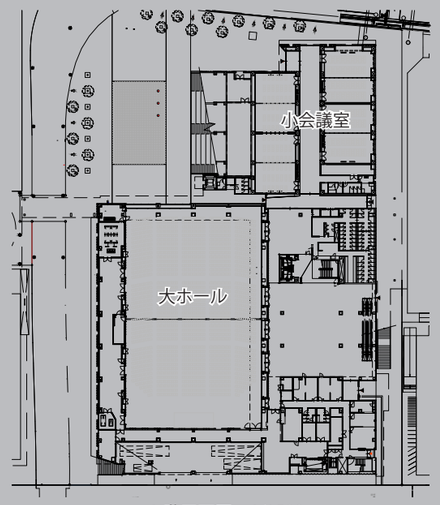
宇都宮駅東口交流拠点施設（ライトキューブ宇都宮）
宇都宮駅東口交流広場（宮みらいライトヒル）

JR 宇都宮駅から全景を望む。芳賀・宇都宮ＬＲＴの起点でもある

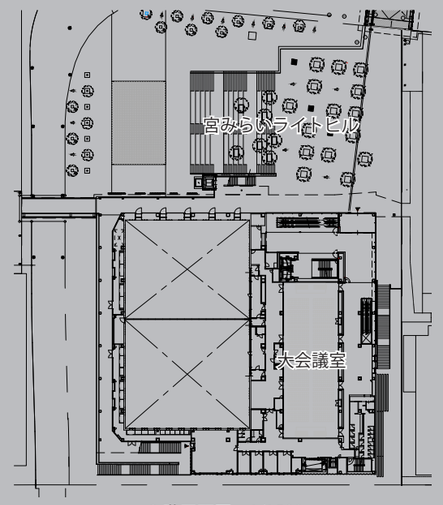
外観大階段正面夜景。大階段ではダンスや読書にいそしむ人々の姿が見られる

外観鬼怒通り側夜景。駅舎からメインエントランスまで直結となる

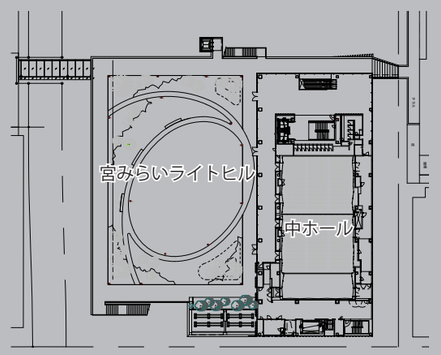
栃木県宇都宮市のＪＲ宇都宮駅東口地区にあるコンベンション施設であり、駅舎からメインエントランスまで直結の、全国有数のアクセス性を有する。
交流拠点施設は、立体的に構成された３つの特徴をもった交流広場との一体利用により、多様な使われ方が可能な施設づくりを目指している。
宇都宮の特産でもある大谷石を外装、内装に大々的に使用し、外観は大谷地域の山並みを連想させる形態をとることで、宇都宮を象徴する外観を宇都宮の玄関口に創出させた。
本施設は大ホール、中ホール、大会議室、小会議室で構成され、それらの適正な分散配置と複数のエントランスや縦動線の分散配置により、学会などでの館全体を１つの催事で利用する運用や、館内で同時に異なる複数の催事利用の両方に対応した施設計画としている。
自家発電設備や太陽光発電、災害時対応トイレなど、災害時対応および駅前施設として帰宅困難者にも対応できる施設としている。



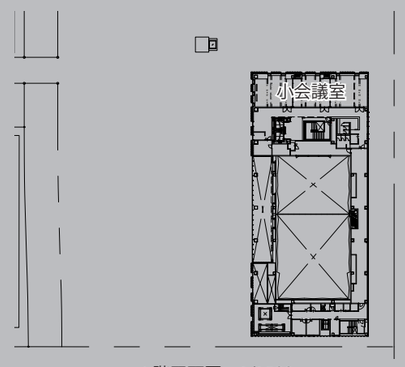
1 階平面図　1/1500



2 階平面図　1/1500



3 階平面図　1/1500



4 階平面図　1/1500

■建築主コメント (野村不動産、宇都宮市)

本プロジェクトは 2018 年 5 月に、コンソーシアム「うつのみやシンフォニー」が事業プロポーザルに応募したところからスタートし、宇都宮市および野村不動産が、設計者、施工者、施設管理者、運営予定者と協議をしながら施設整備を行った。
施設整備にあたりコンセプトを「宇都宮駅東口地区整備事業の核となり、交流と賑わいを創出する施設」とし、その具現化のため、例えば 1 階の大ホールや 3 階の中ホールについては、イベント開催時等において交流広場との一体利用ができるよう計画を行った。
事業プロポーザルから 4 年半、宇都宮市及びコンソーシアムを構成する各企業の協力により、2022 年 11 月 30 日に施設がオープンした。
「ライトキューブ宇都宮」・「宮みらいライトヒル」が市民の方々に喜ばれ、駅前の賑わい創出、市のさらなる発展に寄与していくことを願っている。

■設計者コメント (ＡＩＳ・アールアイエー・隈設計共同体)

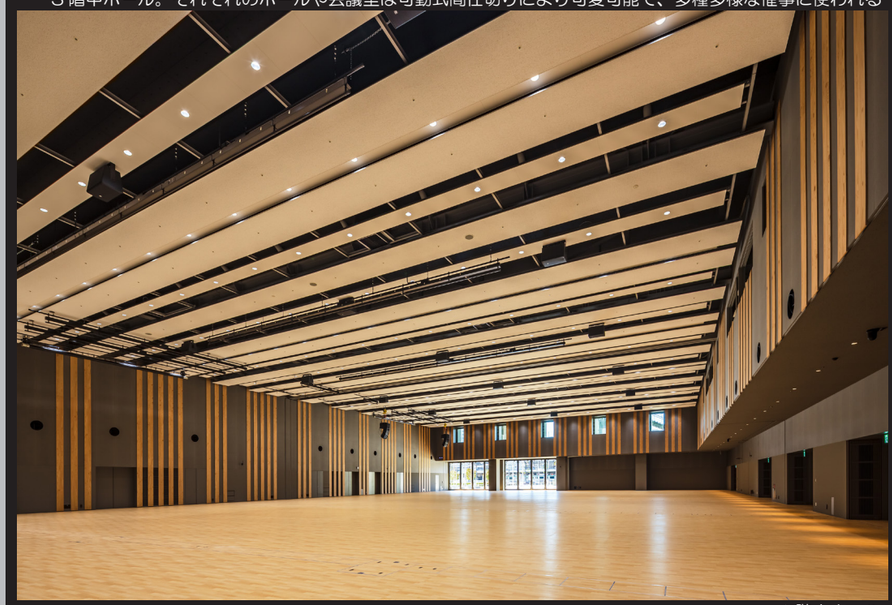
設計は、国立競技場を設計した隈研吾氏を含めた 3 社による設計体制で進めており、駅前に新たに誕生する市の顔となるよう、交流拠点施設と交流広場の一体的な整備が図られた。
本施設は、宇都宮の特産でもある大谷石を外装、内装に大々的に使用している。外装に使用している大谷石は切り出し寸法の W300 × H900 を基調に、40 mmの段差をつけた大和張り工法を採用した。従来の大谷石表面の美しさと大和張りにより凹凸ある面の構成が陰影により時間と共に異なる表情を生み出し、ここにしかない奥深い美しさを創出している。
また、来訪者の目線レベルで、ガラスを多く採用することで従来は閉ざされた印象のあるコンベンション施設を駅前の開かれた施設づくりとなるよう配慮している。

■施工者コメント (前田・渡辺・中村・増渕建設共同企業体)

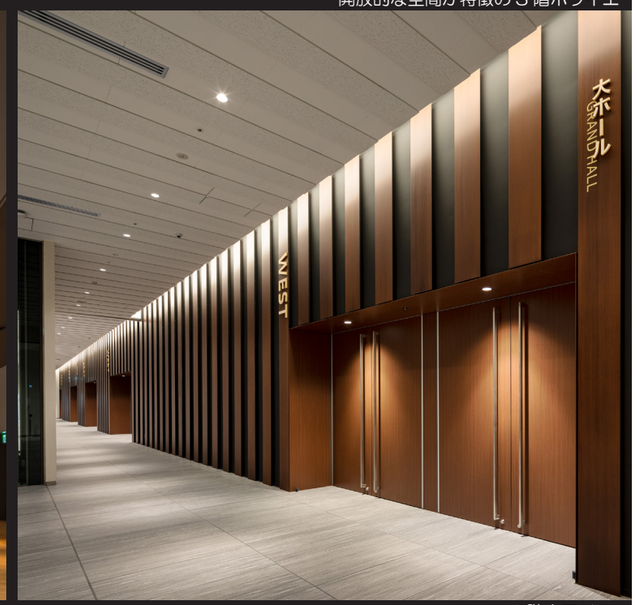
現場乗り込み前段階において、BIM による 3D モデルを活用し、鉄骨梁や設備ダクト及び舞台機構等の納まりを見える化し、スムーズに施工が行えるよう調整を行った。また複雑な形状の外壁に対して設置する外部足場についても同様に 3D モデルを活用し、干渉や施工検討を行うことで生産性の向上が図られた。
大ホールトラス鉄骨において、トラス鉄骨を 34.4 mのスパンに設置するため、中央をベント支柱で受け、地組による施工方法を取った。
外壁大谷石の施工についても、関係者で密に協議を行い、施工方法、安全性の検証、及び試験に時間をかけ、またモックアップを作成し、デザインをこわさないようにしながら安全性も取られた施工方法とした。

３階中ホール。それぞれのホールや会議室は可動式間仕切りにより可変可能で、多種多様な催事に使われる

開放的な空間が特徴の３階ホワイエ



１階大ホール



１階ホワイエ

外観２階エントランス正面ディテール。宇都宮の特産品「大谷石」を随所に使用

真俯瞰。３つの交流広場に囲まれる